

右太鼓は後々まで傳來せし處、享保年中本堂焼亡し、其の頃太鼓も焼失すと云ひ傳へたりと。但し舊記等傳來無之、僅に先代より口碑に傳承するのみ。右太鼓は藩祖利家卿の陣太鼓也ともいひ傳へたりと。又右火災は、享保十三年申二月廿六日自火にて、本堂向のみ焼亡せしなり。此の時微妙公の親翰等焼失す。再興の節松木五百本を賜はり、右松材木を以て再建せし本堂于今在存すといへり。按ずるに、享保十三年二月廿六日本堂火災の事、護國公年譜および金澤變異記等に記載せず。年曆月日、及び火災に付き松木拜領等の事まで傳承すれど、其の事實記録どもに所見なきは如何なる事歟詳かならず。

○妙法寺臺所茅葺傳

金澤市中にて、茅葺の名高きは、妙法寺の臺所なり。寺中の傳説に云ふ。往昔此の泉野に寺地を賜はりて、枯木町より移轉せし頃、此の地に元より農家の建物ありしを、その儘買求めて寺中の臺所となしたり。依りて後々までもその遺製を守り、于今茅葺になしたりといひ傳へたり。故に此の臺所は、數百年を経たる建物なりといへり。按ずる

に、茅葺は國初の頃藩士の居宅にも多かりけん。左の達書あり。  
小身に而茂かやぶきの長屋仲間敷、若し於有之者、板に而早々ふき直し可申候。無左候者こぼち可申候。廻番之面々見届、こぼさせ可申旨被仰出候。右之趣御組中急度可被仰觸候。恐々謹言。

二月十一日

小幡宮内

葛卷藏人殿

茨木右衛門殿

猶々御披見之後、御名之下に御判形候て可被返下候。

如此御觸に候條、寫遣之候。御一宗中寺庵に可被仰觸候。無油斷火之用心、晝夜無慢怠様申渡可被成候。恐惶謹言。

葛卷藏人

茨木右衛門

右達書の年曆未詳といへども、寺社奉行前録に、慶安元年葛卷藏人岡嶋市郎兵衛茨木右衛門三人寺社奉行被仰付と見え、承應二三年頃の諸寺庵書付どもに、葛卷藏人岡

嶋市郎兵衛茨木右衛門・山森吉兵衛の四名を載せたり。されば右達書も、慶安・承應の頃なるべし。妙法寺泉野へ移轉は、後の由來書には天正十八年とあれども、貞享二年の由來書に、元和元年於泉野拜領被仰付とあるもの實説なるべければ、右臺所は元和以前の建物にて、慶長年中に建てたるならんか。實に三百許年を経たりといふべし。

○開基圓智院傳話

今寺中に存在せる由緒書に如左記載す。

一、圓智院様御事は、佐脇藤八郎様御息女に而、高德院様御姪子様に御座候處、御養女に被遊、篠原出羽守殿へ御輿入被遊候。其後圓智院様に御誕生之御姫君、又々高德院様御養女に被遊、伊藤主殿先祖濃州大垣之城主伊藤長門守殿子息伊藤圖書頭殿へ御縁組あらせられ候處、正保二年八月廿八日御卒去被遊候。御戒名は鏡智院理應日緣大姉と唱へ奉る。則當寺に御墓所・御位牌とも御座候。右之御由縁を以圓智院様御年忌等之節、伊藤兩家より御香奠御備申候。

一、當寺之儀は、元來尾張荒子に罷在候處、高德院様越前へ御越被遊候節、御意を以當寺も越前へ引越、高木村に住

居仕候。其後御當國へ入らせられ、亦々當寺も召寄せられ、泉野に只今之地面拜領被仰付、寺再建仕候。  
一、圓智院様御事は、篠原家より御歸殿あらせられ候後、御逝去被遊、當寺へ移させられ候由傳承申候事。

弘化四年未八月

泉野寺町妙法寺

又別記に云ふ。當寺開基圓智院殿は、利家卿之舍弟佐脇藤八郎殿息女也。篠原出羽守方へ入輿、一女出生、利家卿被爲成養女、濃州大垣之城主伊藤長門守子息圖書頭与縁組也。圓智院殿後城内に歸住也。慶長三年八月晦日卒、法名圓智院殿妙淨鹽尼。とあり。そのかみより寺中に納めある圓智院殿の繪像今にあり。其の肖像垂髪にて、紙中に如左記載あり。

慶長第三天戊辰仲福下滯晦日

圓智院妙淨尊鹽尼

寄附之物品は紺紙金泥法華經八卷七條法服蜀江錦也。此の外に鬼子母神木像あり。寺傳に云ふ。右法華經は菅相丞の眞筆也と。また蜀江錦の七條法服は、利家卿の召し給へる陣羽織を法服になしたるなり。また鬼子母神の木像は圓